

『浄土真宗聖典全書』 完結

—「相伝篇上・下」について—

最終回

浄土真宗本願寺派総合研究所
教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉

はじめに

浄土真宗本願寺派総合研究所において編纂を進めてきました『浄土真宗聖典全書』（以下、『聖典全書』）の完結を記念して、これまで三回にわたり本書の特色を紹介してきました。最終回となりました今回は、親鸞聖人のみ教えを相伝された方々に関する聖教や史資料を収録した第四卷の「相伝篇上」（平成二十八年三月刊行）と、その続篇となる第五卷の「相

伝篇下」（平成二十六年三月刊行）について、特徴や魅力についてご紹介したいと思います。思います。

「相伝篇」は、収録内容によって上下の二巻に分かれています。その内容について簡潔に述べますと、「相伝篇上」は、親鸞聖人からの相伝のうち、第八代宗主蓮如上人より前の時代の聖教や史資料を収録しています。すなわち、親鸞聖人の直弟である高田の真仏上人や顕智上人による経論釈の抜書集、本願寺第三代宗主である覚如上人や、その嫡男

である存覚上人に関連するものを収録しています。一方で「相伝篇下」は、蓮如上人に関連する聖教や史資料を中心に収録しています。

「相伝篇上」の特徴

I 底本・対校本の増加

『浄土真宗聖典（原典版）』に収録される聖教も「相伝篇上」には多く含まれています。同じ聖教であっても、底本（文字に起こす元になる本）や対校本（系統の異なる本）を変更しているものがあります。それは、『聖典全書』では、底本・対校本を最新の研究成果等に鑑みて、選んでいるからです。

例えば、『報恩講私記』は本山御藏版から真宗大谷派藏版、二年蓮如上人書写本へ、『嘆徳文』は本山御藏版から本願寺藏寛正二年蓮如上人書写本へ、底本が変更されています。新たな底本は、共に最古の書写本であり、善本（すぐれた本）としての評価のあるものです。ま

た、『口伝鈔』・『浄土真要鈔』・『改邪鈔』・『執持鈔』・『持名鈔』について、『浄土真宗聖典（原典版）』に比して対校本が追加・変更されています。

Ⅱ 比較しやすい二段対照

覚如上人によって撰述された『親鸞聖人伝絵（御伝鈔）』は、親鸞聖人のご生涯について記された書物ですが、覚如上人自身により何度も増補されていることから、内容に複数の系統のある書写本が現存しています。つまり、それぞれの写本を比較すると構成の変化や文章の異同等がみられます。そこで、「相伝篇上」では、覚如上人の最終稿と言われる康永本を上段に配し、原初の文体を伝えるとされる西本願寺蔵本を下段に配し（専修寺蔵本は対校本で採用）、対照の便を図りました。

また、その分量によって二系統が現在伝わっている『教行信証大意』につきましても、上段に序文や結語部分を含む広本系統、下段にその大部分を欠い

た略本系統を配して対照させています。

このように、異なる系統が伝わる聖教を対照させることで、その異同を視覚的にわかりやすく示しています。

Ⅲ 『聖典全書』間連絡ページの活用

『聖典全書』間連絡ページについては「宗祖篇上・下」でもご紹介しましたが、「相伝篇上」にも便利な連絡ページを、「六要鈔」と『選択註解鈔』とに付しています。

『六要鈔』・『選択註解鈔』は存覚上人の撰述であり、それぞれ『教行信証』（宗祖篇上）所収）・『選択集』（三経七祖篇）所収）について逐語的（文の一語一語を忠実にたどること）かつ精緻な註釈が施されています。両書はともに分量も多く、読み進めていくうちに、『教行信証』・『選択集』のどこを註釈しているのか見失ってしまうこともあるかと思えます。そこで読解の便を図りまして、両書の下欄には、それぞれ「宗祖篇上」、「三経七祖篇」の連絡ページを付し

ています。

是非ともこの『聖典全書』間連絡ページを活用いただければと思います。

Ⅳ 『存覚上人袖日記』錯簡の復元

存覚上人の撰述である『存覚上人袖日記』（以下、『袖日記』）は初期真宗教団の動向を知る上で重要な史料です。しかし、本書の状態は、長い歴史の中で散逸や錯簡している箇所が多く、成立当時の形態が不明瞭となっています。そのため、今に至るまで、さまざまな研究者の手によって原初形態に近づけるよう何度も復元作業が行われてきましたが、それらの翻刻資料は必ずしも一致するものではありません。そこで「相伝篇上」では、今までの成果に鑑みた上で、あらためて『袖日記』錯簡箇所について検討し、翻刻しています。

また付録として『存覚上人袖日記』対照表を配しました。本付録は、本聖典の『袖日記』と、これまでに翻刻・刊行された『袖日記』の諸本との相違を明

確にするためのもので、本聖典の『袖日記』と、諸翻刻との異同が一目でわかると同時に、他翻刻との比較を行う際の索性にも優れています。

本付録には、『袖日記』の本文に記された用語（人名・書名・地名・寺名）を採録し、五十音順に並べた『存覚上人袖日記』索引も配しています。用語についての別称や略称なども（ ）で併記してありますので、『袖日記』中、どの箇所にもどの用語が書かれているか検索できるようにとなっております。

是非、これらの付録をご活用ください。

「相伝篇下」の特徴

I 「相伝篇下」に収録されたもの

「相伝篇下」には、蓮如上人が伝道教化に用いられた「御文章」や、子弟や門弟によって記録された蓮如上人の「言行録」、また仏教の無常観および自身が教えに出遇えた悦びに基づいて詠まれた

「和歌」などを収録しています。蓮如上人の思想や当時の状況を知る上で欠かせない一冊です。

II 「蓮如上人言行録集成」の活用

蓮如上人の法語や日常の教化の様子などを記録した言行録の多くは、蓮如上人の示寂後まもなく制作されました。その後、それらをまとめて編纂されたものが『浄土真宗聖典（註釈版）』（以下、『註釈版』）にも収録されている『蓮如上人御一代記聞書』（以下、『御一代記聞書』）であり、これは言行録の集大成として位置付けられています。この『御一代記聞書』の素材となったものには、『空善聞書』・『蓮如上人御物語次第』・『蓮如上人一語記（実悟旧記）』・『蓮如上人仰条々連々聞書』など、十数種の言行録があります。「相伝篇下」ではこれらとして収録しています。

これらの言行録の中

には、本文が重複する箇所が少なくありません。たとえば、『御一代記聞書』第五条に書かれている「本尊は掛やぶれ、聖教はよみやぶれ」（「相伝篇下」五二七頁）という文は、『蓮如上人一語記（実悟旧記）』と『蓮如上人仰条々連々聞書』にも同文があります。このような諸言行録の対応関係につきましては、付録「蓮如上人言行録対照表Ⅰ」をご覧ください。れば、一瞥して把握することができま

す。また、この付録だけでなく、諸言行録本文（本文の上下の欄外にあり）に付された『註釈版』への連絡ページからも対応がわかります。たとえば、先述の『御一代記聞書』の文を例に出せば、『蓮如上人仰条々連々聞書』には、第一条に「本尊は掛やぶれ、聖教はよみやぶれ」とあり、その下欄に「註釈版1233（五）」（図1）とあります。これは、この「本

（一）
如
一 蓮—上人仰られ候ひしは、本尊は掛^①やぶれ、聖教
はよみやぶれと、對句に仰られ候。

真聖全3-532(五)
註釈版 1233(五)

（図1）

尊は掛やぶれ、聖教はよみやぶれ」という文が『註釈版』の二二三三頁『御一代記聞書』第五条にあることを示しています。そのように諸言行録にある連絡ページからも『御一代記聞書』との対応がわかるものもあります。

諸言行録の対応関係が把握できることによつて、どのようなメリットがあるのかといえますと、その一つに「内容把握」を挙げることができると思います。

たとえば、『空善聞書』第三四条は、『蓮如上人御一期記』第七〇条と対応しています。『空善聞書』では「ある夜仰に、おれは身をすてたり。ゆへは先住も形儀をも声名をもかたく御をしへ候しかども」（六五五頁）とあります。これだけを読んでも、「ある夜」とはいつのことか、また「先住」とは誰のことかはわかりません。ところが、同内容をもつ『蓮如上人御一期記』第七〇条をみると、「延徳三年の仰に、我は身を捨てたり。其故は玄康法印巧如上人・円兼法印存如上人の時

しましき」（八六二頁）とあります。つまり、ここでは「延徳三年」に蓮如上人が昔の「巧如上人」、「存如上人」の頃の有り様の話をされていることがわかります。このように対応関係にある言行録の中には、情報量に多寡たかがみられ、より詳しくその内容を把握できる記事もあります。

Ⅲ 「御文章」の借用字

「御文章」といえば、五帖しよ八十通がよく知られていますが、蓮如上人はこれ以外にも多くの「御文章」を制作されています。その数は二百数十通ともいわれています。「相伝篇下」では、『御文章（五帖）』はもちろんのこと、そこに含まれない「御文章」も、自筆本や書写本等から網羅的に「御文章集成」として収録されています。採用した「御文章」の自筆本・書写本の全容については、付録「御文章集成対照表」においてまとめています。

ところで、『御文章（五帖）』は、『註

釈版』にも収録されています。「相伝篇下」と『註釈版』とでは、どのような違いがあるのでしょうか。底本は『註釈版』

「相伝篇下」ともに和歌山県鷺森ささのもり別院所蔵の証しよ如上人開版本を使用しています。しかし、両者では、編纂方針が異なります。『註釈版』は、読者にとつてできるだけわかりやすいもの・読みやすいものになるように編纂されていますが、「相伝篇下」では『聖典全書』の「高い史料性を保持しつつ」という基本理念に基づいて、史料としての側面にも重点をおいて編纂しています。その姿勢を象徴するものに「借用字」というものがあります。たとえば、『御文章（五帖）』一帖目第六通には、「由断なくそのかまへはさふらふ」（七七頁）と底本に書かれています。注目したいのが、「由断」です。現代では「油断」とすべきところを、字音が一致する「由」を用いて表記しています。このような表記を学術的には「借用字」などと呼んでいます。つまり、一見間違った表記のように見えますが、音

の同じ字を「借用」して表しているのです。これに対して、『註釈版』は読みやすさを重んじ、現代人に意味が通じるように「油断なくそのかまへは候ふ」（一〇九二頁）と表記を変更して翻刻しているところにその違いがあります。よって、『註釈版』を読むだけでは伝わらない、文体から薫る室町時代の余韻を楽しむのが、「相伝篇下」の特徴です。本

聖典の巻末に「御文章・言行録借用字一覧表」を付していますので、ぜひご覧ください。

最後に

『聖典全書』は第六巻「補遺篇」の刊行（二〇一九年三月）によって、その完結を迎えました（「補遺篇」については『宗報』本年四月号をご覧ください）。浄土真宗聖典の集大成として『聖典全書』という果実が実ったといえますが、この果実をさまざまな方に摘んでいただき、その旨味を引き出していただきたいと思います。

ます。『聖典全書』は、活用されることによって初めて「聖典」としての旨味を味わうことができます。

以上、四回にわたって報告して参りました『聖典全書』全六巻の紹介を終わらせていただきます。今後、さまざまな場面で『聖典全書』を活用していただけることを念じています。

問い合わせは総合研究所（075-371-9244）まで。